

猟師になる

柳瀬川ひろし

その目は想像していたよりはるかに穏やかに見えた。瞳の奥には私の踏み込めない世界が広がっているようだった。

落ち葉で滑る斜面を息を切らして駆け上がって来たとき、奴は私の動悸の原因が斜面を慌てて登ったことにあるのではなく、自分という野生動物に対する恐れにあることを見透かしていた。

そういう目だった。

私はこんな日がいつか来ることを承知していたにもかかわらず、罾を仕掛けてからというもの、心のどこかでそれを回避したいという想いが大きく膨らんでいたことに気付いていた。

私は、田と山の境に掘った水路の上の斜面を30メートルほど登った大きな椎の古木の根元近くにその罾を仕掛けた。ここは斜面の中でも幾分勾配が緩やかになっており、猪の足跡からも、その日の餌場を決めるであろうポイントになっていることが随分以前から分かっていた。ここなら必ず罾に掛かるだろうとも思っていた。ワイヤーの端にはアンカーは付けず、古木に嚴重に巻き付けておくことにした。

奴はそこら中を走り回り、掘り回ったと見えて、地面は深く抉られ、落葉は半径2メートルほどの範囲に一枚も見られないほどに蹴散らかされていた。

奴はふかふかになった地面と掘り返された古木の根元に横たわるように腰を下ろしていたが、罾に掛かった左前脚は皮が裂け赤い血肉が剥き出しになっているように見えた。古木の根元には、奴の爪痕が痛々しいまでの深さで無念さを刻み付けていた。私は首筋に寒気を感じ防寒着の襟を立てた。

半径2メートル足らずの奴の自由を保障するワイヤーはまだ有効であるように思われたが、奴は私を見ても動き出す気配すら見せなかった。

私は恐怖と悔恨の念に駆られながら一晩を過ごしたであろう奴の今の心情を読み取ろうとじっと瞳を覗き込んだが、そこには私が期待したような表情は少しも映し出されてはいなかった。

私は用意してきた止め刺し用の槍を足下に置き、ポケットから文庫本の般若心経を取り出した。

源蔵さんは、「鉄砲の許可も取っちゃいた方がええぞ」と言ったが、私は断った。それだけは必要ない、使いたくないと思った。

奴はときどき頬を膨らませブフォツという声を低く絞り出すように響かせる。それは仲間の猪たちに無様な最期だけは見せたくないという虚栄心の表れなのかもしれなかった。

私は去年の秋、源蔵さんに罾猟師になることを勧められたときのことを思い出していた。

「人任せじゃのうて、自分でやってみたらどうよ。自分の田は自分で守るのが一番ぜよ」

「でも源さん、掛かったら止めを刺すわけでしょ。自分で」

「そらそうよ。上手にやっちゃらんとシシも惨いきねや。そんですぐ血抜きしてから解体せんといかんし、掛かったら結構なぐれるわえ」

「できますかねえ、私でも」

「なんちゃあじゃないちや。練習台になってもらいや、最初の一頭には」

源蔵さんは屈託のない笑い声を里山に響かせた。

「初心者には止めがいったん難しいろうねや。そらそうよ、ほとんどの人間は動物の息の根を止めるような生活らあしやあせん。おまけに相手はシシぜよ。下手したらそこらあの犬より大きいきねや。あとは慣れだけよ」

私が8月頃から頻繁に出没するようになった猪に業を煮やして役場に相談すると、すぐに紹介してくれたのが猟師としても信頼の厚い源蔵さんだった。源蔵さんは同じ町内だが、山一つ向こうの集落に住む林業家だった。

源蔵さんは初め、「わしが捕っちゃう」と言っていたが、私の米作りに懸ける思いを知ると「ずっと米作りするがやったら自分で捕った方がえい。自分の田は自分で守りや。わしが教えちゃうき、罾猟の免許だけでも取っちゃよきや」と猟師になることを勧めてくれた。

奴は私がいつまでも手を出さずにいることをどう思っているのだろう。よく見ると奴はワイヤーを古木に一回転させていた。先に進もうとしても一步も動けないだろう。それでも私は、奴が不意に逆方向に回転し、自由になったワイヤーの伸びしろを利用して突進してくるのではないかという不安を拭い去ることができなかった。

「シシは耳の後ろが弱点ながよ。そこを槍でちゃんと狙わんといかんぜよ。鉄砲か電気を通した針なら一発やけんどねや」

源蔵さんは括り罨猟の講習を受けて許可をもらってからまた具体的に教えちやると言ってくれた。

猟師の世界も高齢化が進み、狩猟免許を持つ人の数が年々減っているらしい。一方で駆除しなければならない猪や鹿は増え続けているという。

源蔵さんの人柄にも引かれ、私は講習会に参加し生まれて初めて罨の実物に触れた。驚いたのは、いたずらに負傷鳥獣を増やさないという配慮から罨のサイズが決められていたりストパーが効くような構造になっていたりすることだった。また対象外の鳥獣が被害に合う可能性もあることが分かった。

掛かったら死んでしまうような恐ろしい罨はほとんどなくなっただけらしい。結局は殺処分されるのに、死に至る過程に心を配るということなのだろうか。罨に掛かって死んでくれたなら自ら手を下さなくてもよいのにと考えてしまうのは、私に猟師になるという厳然たる心構えがないからだろうか。

奴を見ながら私はふと、奴は雄なのだろうかと考えた。

私の田を荒らし回ったに違いないであろうこの猪は、足を括られ身動きできずに横たわっている。私にはそのように見える。奴の口元を凝視したが、牙らしきものは見当たらない。私は奴が雄ではないことを確認し、ならば奴のイメージを荒々しい雄ではなく、子育てに励む雌として認めたくて「奴」と呼ぶことにした。

近くに瓜坊の気配はないようなので、私は安堵した。子育て中の母親を殺してしまつては後味が悪い。こんなことを考えているようで本当に猟師になれるのだろうか。

だいたい猟銃を使うのは嫌というのもおかしい話だ、しかし、自分の中ではまだどうにも割り切れずにいる。

私は手にしていた文庫本を開き「般若心経」のページを探した。

「かんじーざいぼーさつ ぎょうじんはんやーはーらーみーたーじー しょうけんごーおんかいこう どーいっさいくーやく・・・」

私はお前と出会うべくして出会った。故合って命をいただくことになったが、万物が流転してゆく広大な宇宙にあって、ともに生と死の境を超えた存在として認め合おう。

5分ほどで読み終えた私は、足下に置いた止め刺し用の槍を手にとると刃に取り付けたカバーを外した。槍は源蔵さんに教わったとおり、使わなくなった剪定ばさみの片刃を鉄パイプに取り付けて作った。刃渡りは14センチほど。刃渡りが15センチ以上だと銃刀法違反になるらしい。

猪が田に出没し始めた頃には共存の道もあるのではないかと考えていた。山際にある田を猪のぬた場に提供し、他の田を守ろうとしたこともあったが、そんなことの通用する相手ではなかった。一晩で数アールの田をだめにされたこともあった。

それからというもの、私は防獣ネットで全周を囲うようにした。だがこの方法も完全ではなかった。

考えた末のことなんだ。私は奴に言葉をかけた。そろそろお別れだよ。

槍を右手でしっかり持ち、肘を高く上げて縦に構えてみた。首筋に悪寒を感じた。

「槍は刺したらすぐ引きや。刺し方が浅い思うてもすぐ引き抜きや。刺しっぱなしにしたり押し込んだりしたらいかん。絶対ぜよ。刺してすぐ抜く練習を何回もしちよきや」

源蔵さんには構えと引きについて何度も何度も言われた。私は猪に見立てた藁束で暇さえあれば練習してきた。

奴に無用な苦しみを与えることなく旅立たせてやるのだ。生と死の境界線に立つ奴は、今何を思っているのだろうか。

奴のブフォツという声が弱々しく聴こえてきた。最期のときを悟ってぐったりしているのだろうと奴の方に視線を送ると、立ち上がってこちらを凝視している姿が目に入った。

私と奴は正面から対峙する形になった。正面からでは槍が使えない。さっきのように横たわっていてくれたなら楽だったのに。

私は止めを刺す前にあれこれ考えたことを後悔した。そんなことは、これまで何度となく自問してきたはずではなかったのか。

奴の側面に立とうと移動すると、奴もやはり体の向きを変えた。こんなやり取りを繰り返しながら一瞬の隙を見付けて耳の後ろを刺すのは至難の技だ。

奴は罾に掛かってからの一晩を躑き苦しみ通している。左前脚の痛みも半端ではないだろう。すぐにでも奴に安楽な死を与えてやらなくてはならない。それが獵師になると決めた私の果たすべき使命だ。

私は左手を槍に添えると、奴との間をはかりながら右に左にと位置を変えた。

静寂の中、自らの鼓動が高鳴ってくるのを感じた。それはやがて首筋を這い上がり耳の後ろに回り込んで強弱を強めた。

「しきそくぜーくう　くうそくぜーしき」

私は一瞬たりともチャンスを逃さないぞと猪の動きに神経を集中させた。